

永久平和

石原莞爾自筆

第142号
(平成29年10月25日)

宣言 (昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

目次

巻頭言……………	1
満洲国建国は正当である 米国人ジャーナリストが見た、 歴史の真実	木下靖夫
◆アジアの安定に 大きな役割を……………	2
●工藤正一同志を偲んで……………	4
●異民族から見た天皇観……………	5
●会員便り……………	6
SNS……………	8
●石原莞爾語録……………	8

満洲国建国は正当である

―米国人ジャーナリストが見た、歴史の真実―



当会運営委員 木下靖夫
(放送大学学生)

今上天皇が平成27年の年頭所感で満洲事変に言及されたことが話題となりました。

「本年は終戦から70年となった節目の年に当たります。多くの人々が亡くなった戦争でした。各戦場で亡くなった人々、広島、長崎の原爆、東京を始めとする各都市の爆撃などにより亡くなった人々の数は、誠に多いものでした。この機会に、満洲事変を始めとする戦争の歴史を十分に学び、今後の日本のありかたを考えていくことが大切だと思っています。」という所感でした。

満洲事変Ⅱ自作自演・空想的善意・首謀者・放火犯人・消火作業犯人 石原莞爾

石原像は「石原莞爾 その虚飾」論もあれば、「永久平和の使徒石原莞爾」論など、数多くの石原論がみられます。故佐治芳彦氏の石原像は「石原莞爾は矛盾の多い人物である。それだけ毀誉褒貶が激しい。私は、もともと人間は矛盾の塊とみてきたから、その個々の言動の矛盾に對して、自分のことを棚に上げて、それこそ鬼の首を取ったように、わめき散らすといった趣味はない。

私にとって問題は、彼が「果たした役割」と「果たそうとした役割」にのみある。』という石原論です。他にも「石原像は望遠鏡で見ると顕微鏡で見るとの違いだ。同時代史は顕微鏡で見ると歴史というのとは望遠鏡で見ると顕微鏡で見ると同時代史のなかでは石原の全体像をつかみきれないように見える。おそらくはあと四半世紀ほどの時間を経たら、この巨人を歴史として受け止められる日がくるのではなからうか。」という石原論もあれば、石原像を「先見性指導者」

「実行者」同時に冷徹な「軌道修正者」といった石原論もあります。「石原莞爾その虚飾」本の著者の石原像は「満洲事変というものを放火して、後で日中戦争拡大に消火しても最初の罪が消えるものではないから放火犯人の消火作業である」という石原論です。この虚飾論に對し反論するものとみられる「満洲国建国は正当である」という本が存在します。この本の著者は米国人のジャーナリストのジョージ・ブロンソン・レー氏で、レーの氏の略歴は、中国在住32年間、袁世凱や孫文と親しく、昭和10年(1935年) 当時は満洲国政府外交顧問で、当時の条約や国際法、歴史的経緯などを踏まえて様々な角度から満洲国建国の正当性を立証しています。本書は建国から3年を経た時点に発刊されたものですから注目の価値があります。本書中に「満洲国は、悲劇に見舞われ続けた広大な支那の土地に明るく耀き始めた光である。満洲国の樹立という先例は、地球の西半球の全人口も超える一大民族にとって幸福を得られるかもしれないという希望となっているのだ」と記述しています。「国づくり」がそこに住み、生活する人たちから「白い目」で見られなかったかどうかが問題ですが、レー氏は住民の目は「希望の目」で見たと述べていますから、石原の点火は「浄化の火」で「汚れた火」の点火犯人ではなかったといえます。

「浄化の火」を消さないためにあらゆる努力をする石原が、大義なき日中戦争・太平洋に對したことは、満洲事変がその後の戦争とつなげるものではなかったといえます。

細川元総理は「日本は侵略戦争をした」と発言しました。彼は満洲事変は大義がありその後の戦争は大義なき侵略戦争と理解していたと思います。

以上が今上天皇の「年頭所感」に對する私の学びです。

木下靖夫 (きのした・やすお) …大正14年(1925年) 鳥取県鳥取市生まれ。中央大学法学部卒。国家公務員(労働基準監督官)として勤務。鳥取労働基準監督署長退官後地方議会議員。平成25年叙勲受章。会員歴=軍事史学会、日本国体学会、日本沙漠緑化実践協会、緑健文化研究会、日本有機農業研究会。現在会員=NPO法人NALK(ナルク)、はちどりクラブ等。放送大学学生として生命科学と宇宙科学を研究中。

石原莞爾語録 其の二

「石原莞爾のすべて」(菅原一彪・仲條立一著)
から石原莞爾語録をご紹介致します。

二十六日早朝、阿南さんから、将校らが兵隊を連れて叛乱を起して陸軍省、参謀本部を占拠しているから早く来てくれ、という電話で始めて事件を知った。私は直ちに飯沼さんに知らせ、歩兵第三連隊長の渋谷、歩兵第一連隊長の小藤に、直ちに連隊旗を奉持して三宅坂へ出て来い。そして叛乱将校に連れられている兵に連隊旗のもとに集合を命じ、兵を集めて引き揚げてしまえ。そうすれば残るのは僅かな将校だから事件は極めて簡単に鎮圧できる。必ずそうするように、といって参謀本部に急行したが、渋谷も小藤も、俺の言ったことをやっていた。その通りにやれば、あんな騒ぎにはならなかったのだ。兵は連隊旗には絶対に叛かない。必ず連隊旗の下に集まる。事件は簡単に片づくのに、なぜかそれをやらなかった。

真崎は、あの日、旭日章を吊って陸軍省に来ていた。何の意味で大事件の日に旭日章を吊ってきたのか。誰が考えてもおかしいではないか。叛乱将校らの目的が通って、革命政府ができたなら、その棟梁である真崎に、組閣の命が降下するとも思いこみ、すでにお召しの場合を考慮して旭日章を吊ってきたものとしたか俺には考えられない。大体が西郷隆盛になる(若者の責を負って割腹自刃)だけの度胸もなく、若い将校らにやらせ、いざ事が否になれば、知らぬ、存ぜぬで逃げる奴に

何ができるというのだ。

* 以上は二二六事件後高木清寿氏に語る。

満州事変勃発当時、私は作戦面を受けもつ関東軍参謀であったが、私は満州の独立を主張した一人である。私が満州の独立を主張したのは二つの理由からなっている。

即ち、その一つは、軍人的見地からして、東亜防衛の根拠地としての満州より出発している。日本は、ソ連の南下に極めて重大な関心を有するものであるが、張作霖、ソ連戦争にも見られるとおり、当時の満州実力者の防衛は極めて手薄であった。

他の一つは、主として政治的原因によるもので、この点、中国人の方々は憤慨されるかも知れないが、当時、中国と日本とは連続的に紛争が絶えず、中国本部では、しばしば日本との政治的、経済的親善が反対された。

ところが満州は、その歴史的関係においても日本と非常に密接である。したがって満州を中国本部から切り離すことは、日支間の紛争を少なくし、さらに日支提携を促進するとともに同地をソ連に対する防衛力としてその基礎を固めることができる考えたからである。この私の見解は、在満中国人の同意の上で実行に着手されたわけである。断っておくが、自分の考えとしては、これが実現すれば在満諸民族は全く平等とし、満鉄、旅順、大連は、即時、満州国に返還し、中国にある日本のあらゆる政治的権益は無条件で中国に返還する意向であった。かくすることによって、日満共同してソ連に対抗できるものと考えたからである。しかし、私のこの主張は実現しなかった。

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒270-1158 千葉県我孫子市船戸1-3-15-113

石原莞爾平和思想研究会事務所内

FAX 04-7183-5591

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人 「永久平和」編集委員会

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第142号 平成29年(2017年)10月25日発行

満州国独立の結果は、日本人が満州を独占して、他民族を圧迫し、建設そのものもたくさんビルディングを建築したのと鉄道を敷設したにとどまった。産業開発もまた期待を裏切った。私は在満中国人に対する約束を裏切った。この意味において、私は立派な戦争犯罪者である。私はこれら独立に協力した満州中国人に対して甚だすまなかったと考えているし、ただ中国の当局者が、これらの人たちに寛大な態度をもって臨まれるよう希望するのみだ。私は満州国独立に対しては以上のような意見であったから、溥儀氏を皇帝に推すことに関しては、なんらの関心をも持っていなかった。

日本は今後、土地や物資を争う考えをやめて、この狭い土地の中で新しい希望をもって高い文化を造らなければならぬ。

* 以上は一九四五年九月、満州事変の真相を語った一節から。